

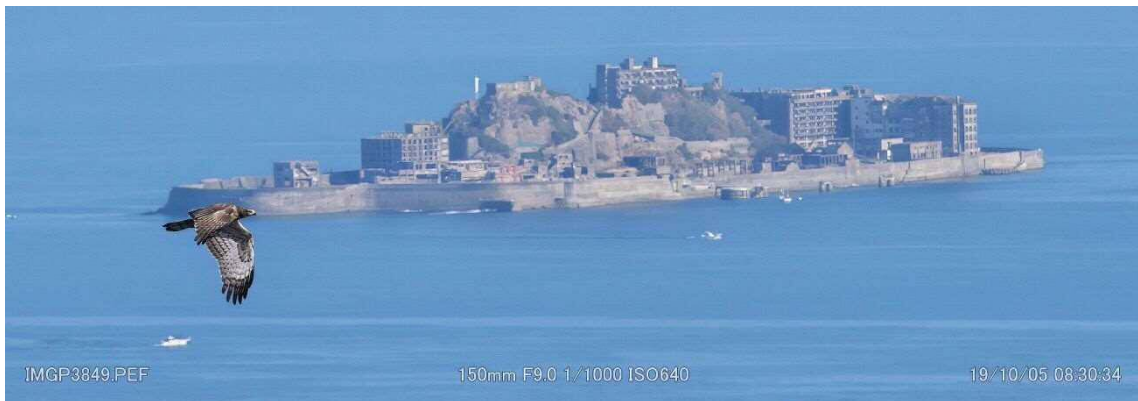
令和4年度 長崎市自然環境調査報告書：鳥類

長崎市自然環境調査委員 吉谷 将史

1 令和4年(2022年1月1日～12月31日) 長崎市自然環境調査報告：鳥類

令和4年1年間に長崎市にて記録された野鳥は237種(別添資料 長崎市鳥類チェックリストのとおり)。令和4年に新たに記録された野鳥は、コマジロタヒバリ(4月)、オニカッコウ(5月)、セジロタヒバリ(10月)の3種で、長崎市の野鳥は過去の記録とあわせ、336種(亜種を含めると350種)となりました(別添資料 長崎市鳥類目録のとおり)。

鳥類目録においては、これまでダイサギについて亜種チュウダイサギのみを記載しておりましたが、冬鳥として全国各地に飛来する亜種ダイサギについて、渡り期に見られることから追加いたしました。また、ウソについてはウソ並びに亜種アカウソの2種を掲載しておりましたが、長崎市で冬場に見られるウソの殆どが大陸から越冬に来るアカウソであるため、アカウソのみ記載することとしました。



長崎市の野鳥の内訳としましては、留鳥(1年を通して見られる)50、夏鳥13(繁殖のため初夏に飛来し、秋には退去する)、冬鳥78(北方で繁殖し、晩秋に飛来、春先に退去する)、旅鳥148(春と秋の渡り期に数日間、羽休めのため滞在する)、迷鳥61(本来のルートとは異なるが、天候不順などのアクシデントにより舞い降りてくる)と旅鳥と迷鳥で200種を超え、実際に日頃から観察できる留鳥・夏鳥・冬鳥は140種余りということになります。上に示した写真は秋の渡りで、軍艦島近辺を飛行するタカ科のハチクマです。

次に季節ごとに見られる主な野鳥を順序だてて紹介していきます。

・留鳥

「ミサゴ」 全長:雄 54 cm 雌 64 cm

主に魚を主食とするタカの仲間で、世界中に広く分布しています。開発などの影響を受けやすく、全国的には減少傾向にあり準絶滅危惧種に指定されています。海洋資源の豊富な長崎市内では比較的に見ることの多いタカで、浦上川や大波止近辺でもよく目にします。

その昔、ミサゴが海岸の岩陰に残しておいた魚を猟師が食べたところ美味であったため、それを発展させ今日の「にぎり寿司」が生まれた。あくまで伝承ですが、ロマンのある話です。



「ハヤブサ」 全長雄 42 cm 雌 49 cm

鳥を専門に狩るハンターです。その姿からタカの仲間を連想しそうですが、実はオウムに近い鳥です。長崎市でも繁殖していますが数は非常に少なく、見る機会はあまりないのですが、多くの鳥が移動する春と秋は、飛ぶ鳥を追って旋回する姿を見ることができるかもしれません。絶滅危惧Ⅱ類に指定されている貴重な野鳥です。



「キウシュウフクロウ」全長 50 cm

「ホーホー、ゴロスケ、ホーホー」、辺りが夕闇につつまれ静寂が訪れる時間。あたりの山から鳴き声を聞いたことがある方は少なからず存在すると思います。ただ、その姿を目にするのは稀で、実際どのくらいの数が長崎市内にいるのかもわかっていません。ただ、私がすんでいる春木町でも鳴き声は聞かれ郊外の住宅地付近の山でも自然林が残っている所では細々と暮らしているようです。



「カラスバト」全長 40 cm

日本列島とその近隣にだけ分布する希少な鳥で、日本の準固有種として天然記念物に指定されています。長崎市では人目につく機会はほとんどないのですが、無人島などでは繁殖しています。長崎市の南端に位置する権現山公園などでは稀にその姿を見る事があります。緑や紫の金属光沢が美しい野鳥です。



「キジバト」全長 33 cm

国内の野生のハトでは最も一般的な野鳥。ヤマバトの俗名でも知られています。大橋近くの浦上川沿いではドバトに混じって見かけることがよくあります。平和の象徴に例えられ「長崎市の鳥」としてハトが指定されています。

またキジバトは夏から冬まで 1 年中繁殖する事でも知られています。



「ドバト」全長33cm

一般によく知られたハトで羽色も様々。レース鳩や伝書鳩はハトの帰省本能を利用して行われるもので、このドバトを改良して飛翔能力を高めたものが使われています。アフリカ北部から中央アジアに分布するカワラバトが家畜として移入され、その後、野生化したものが全国で見られるこの鳥ということになります。位置づけは外来種ということになります。



「アオバト」全長33cm

山の中を散策していると、「ウ～、アオ～、オ～ワオ～」というような不気味な鳴き声を耳にすることがあります。その主こそアオバト。留鳥として山間部に棲息するハトの仲間ですが、警戒心が強く、一般の人の眼にさらされる事はほとんどありません。冬場は山の木々も緑が少なく、姿を確認しやすくなります。



「キジ」全長 雄81cm 雌58cm

昔話「桃太郎」のお供として、また国鳥として広く親しまれているキジ。狩猟対象としても大変人気が高く、保護鳥としてではなく、狩猟目的の放鳥が続けられています。国内には地域ごとに4亜種が居り、キュウシュウキジが長崎での在来種とされていましたが、放鳥のための交配が続き、今では亜種の分布が不明瞭となってしまいました。



「メジロ」全長12cm

梅が開花する2月中旬になると沢山の小鳥が蜜をもとめてやってきます。「梅にウグイス」という故事から、梅の花といえば鶯を連想する方も多いでしょう。しかし実際に目にする光景は「梅にメジロ」がほとんどです。サクラの木にもよくやってきます。花見の時期に枝にとまる小鳥たちをめでの、また楽しいものです。



「シジュウカラ」全長15cm

市街地の公園から山地の林まで国内に広く分布する小鳥。最近の研究では鳴き声を言語として使用していることが解明され、世界的に注目を集めています。しかも20以上の鳴き声(単語)を組み合わせて仲間通しで会話をしているのです。鳥の世界に限らず、地球上には私達の知らないことが、まだまだ沢山あるのかもしれない。



「ホオジロ」全長17cm

「チュッピー、ピーチュー、チロロ、」など美しい声で鳴きます。聞きなし(鳥の鳴き声を言葉にかえた例え)では、「一筆啓上仕り候(イビツケイジョウツカマツソウロウ)」で表現されます。春、野鳥達の恋の季節にさえずる姿を見ると、まるで恋文をしたためているように聞こえてくるから不思議です。



「カワセミ」全長17cm

溪流の宝石と称される青い背とオレンジ色の腹が特徴的な美しい鳥。遠い存在のように思われがちですが、都市部の河川の浄化が進んだ近年では私達にとって身近な野鳥でもあり、長崎市内中心を流れる中島川、浦上川でも見ることができます。カワセミが見られる河川はその餌となる小魚が沢山いるという証でもあります。



「アオゲラ」全長29cm

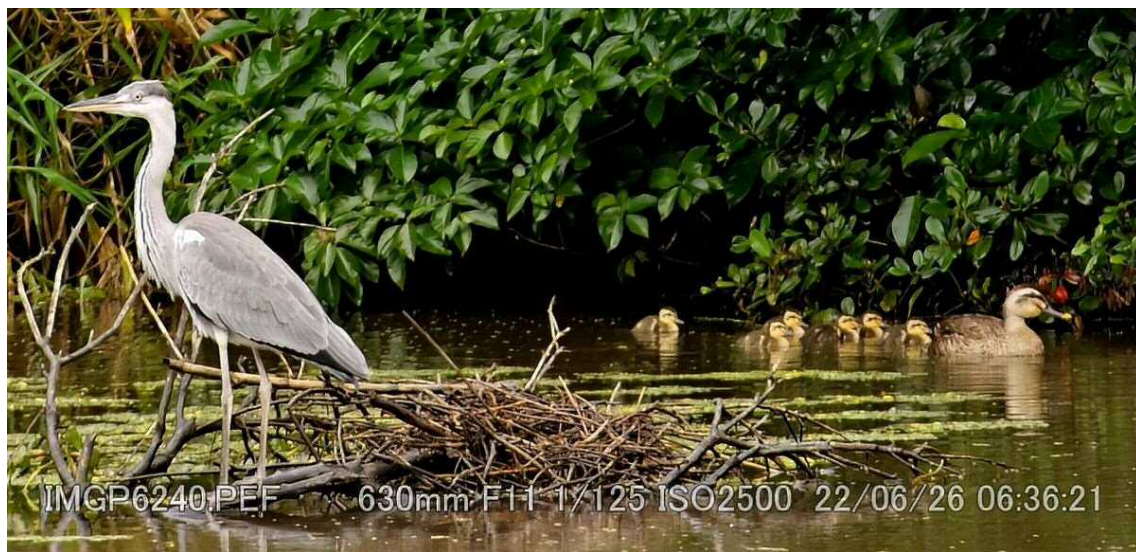
北海道・沖縄をのぞく全国に広く分布するキツツキの仲間。春先には木をせわしなくつついて、巣穴を作るドラミングの音がこだまします。稲佐山や市民の森など、長崎市内各地でも見られる野鳥ですが、世界的には日本国内にしか生息しない固有種で希少性の高い野鳥です。



「アオサギ(左)」全長93cmと「カルガモ(右)」全長61cm

アオサギは最も普通に見られるサギの仲間でも市内各所でも周年その姿がみられます。通状は水辺近くの木の枝に巣を作りますが、この写真のように水上に枝を組み巣を作ることもあります。

奥のカルガモについては、毎年都心部の親子の大移動が世間の注目を集めます。長崎市内でもカモの仲間では唯一繁殖が確認されており、初夏にはこのような親子の光景が見られます。



・夏鳥

「アオバズク」全長29cm

繁殖のため夏場に飛来する野鳥のうち、長崎市内で確認されているのは13種。

なかでもアオバズクについては繁殖に適した環境(樹洞のある古木)が少ないこともあり近年では見る機会が激減しています。アオバズクは巣に適した大木があり、日中も身を隠すことのできる青葉の茂った樹木があれば、小学校の校庭、神社の境内、公園など私達の生活と関わりのある場所でも営巣する鳥なので、その存在を知っていただくことが大切です。

6月から7月の夜半、「ホォー ホッ」と鳴き声が聴こえたら、近くに営巣しているかもしれません。



「オオルリ」全長16.5cm

ウグイス「ホーホケキョ」、コマドリ「ヒンカラカラ」そしてオオルリの「ヒーリーチン」の囀りは日本3鳴鳥として親しまれてきました。長崎市においても、6月から7月の山歩きの途中、その美声を聞くことができます。鳴き声を聞いたら、そっと辺りを見回してみてください。綺麗な瑠璃色の鳥と出会えるかもしれません。



「クロツグミ」全長21.5cm

英名を「Japanese Thrush」といい、日本を代表するツグミの仲間。クロツグミについては雲仙や多良山系など比較的標高の高い地域での繁殖は以前から知られていたのですが、長崎市で繁殖が確認されたのは2020年以降のここ数年です。

温暖な地域では一部越冬するため、長崎市内では冬場にも稀に見かけることがあります。



「ホトギス」全長28cm

「鳴かぬなら …… 不如帰」、戦国大名の信長、秀吉、家康の気質を揶揄する言葉として有名な句でもあらわされるように、古来から数多くの歌に詠まれてきた野鳥で、万葉集では153首が収められています。また托卵する習性でも知られ、ウグイスなどの巣に卵を産みつけ、仮親に子育てを委ねます。



「コチドリ」全長14ー17cm

海岸線の多い長崎市ですが、干潟や湿地は少なくシギ・チドリに代表される水鳥を見かける機会はあまりありません。コチドリは夏鳥として市内でも繁殖が確認されている貴重な種となります。主に河口域の砂利、埋立地等の空き地などで数は少ないですが姿を見ることができます。ユーモラスな歩き方から「千鳥足」の語源にもなっています。



「ツバメ」全長 17ー18cm

夏鳥と言えば、まず目に浮かぶのが燕ではないでしょうか。ツバメが巣作りをした家は、
・人の往来が盛んになる(家内繁盛)。
・害虫を食べてくれる(五穀豊穰)。
に繋がると古来から縁起のいい鳥として知られています。



「コシアカツバメ」全長19cm

ツバメに比べ数は少なく、意外と知られていないのがこの種になります。ツバメよりも少し大きく、写真のように腰が赤みを帯びることで区別できます。また巣の形状にも違いがあり、ツバメがお椀型の巣に対して、コシアカツバメはひょうたん型の巣をつくります。



・冬鳥

「オシドリ」全長41－47cm

長崎県の鳥にも指定されている野鳥でオスは大変綺麗な羽衣が特長。仲睦まじい夫婦のことを、この鳥に例えて「オシドリ夫婦」と言われますが、生存競争の激しい自然界では実際の所、同じ相手と添いとげるのは難しいようです。



「ジョウビタキ」全長14cm

黒い袴をはおったような外見から別名、紋付鳥とよべれます。冬の公園などでよく見かけます。かつては日本では繁殖しないとされていましたが近年、日本各地の高原地帯での繁殖が確認されています。山間の多い地形の長崎市ですが、標高は低いので、夏場には見られない野鳥です。



「ルリビタキ」全長14cm

目の覚めるような瑠璃色が美しいヒタキの仲間。完全な青い羽衣をまとうには3～4年かかると言われています。本州中部以北や四国の一部で繁殖しますが、長崎市では冬場にやってきます。越冬地は主に山間部の暗い藪などでまた冬場に囀りを聞くことは稀で、ひと目にはつきにくく、見過ごされていることが多いかもしれません。



「アオジ」全長16cm

ホオジロの仲間ですが長崎市では冬鳥ですが全国に広く分布し、北海道や本州中部以北では夏鳥として繁殖し、冬場は西日本に渡来し越冬します。名前ですごいところの「アオ」を緑をさし、ジはホオジロの意。オスの頭に緑色味があり、青いホオジロからその名前がついたのでしょう。休耕田などでよく見かけます。



「ミヤマホオジロ」全長15.5cm

頭上の冠羽、オスでは黄色と黒のコントラストが美しいホオジロの仲間。学名にはエレガンスと評される通り、気品を感じる美しい野鳥です。和名にある深山(ミヤマ)からは、山深い所にいるのかと想像しますが、ここでいうミヤマや遠い所からやってくるの意で、主に大陸で繁殖し、冬場日本に渡来します。



「ノスリ」全長55cm

カモの仲間が冬場に沢山飛来するように、肉食であるタカの仲間も冬場に見かける種が多く、ノスリはその中でも目にしやすい猛禽類といえます。タカの仲間の多くは夏場は森林で子育てをするため目にする機会は少ないですが、冬場は里において農耕地などでネズミなどを捕食します。長崎市では夏に見かけることはなく、繁殖も確認されていません。



「ハイタカ」全長 雄 30 cm位 雌 38 cm位

タカの仲間では、見た目にも最も馴染み深いのではないのでしょうか。俊敏に動き回り、古来から鷹狩に広く用いられたことでも知られています。四国、本州では年中見られる地域もありますが、九州では主に冬鳥として渡来します。ユーラシア大陸全域からアフリカ北部まで棲息しています。



「ヤマシギ」全長34cm

水鳥に属するシギの仲間ですが、名前のお通り山間部や公園の林などに棲息しています。夜行性のため殆ど姿を見かけることはありません。

その肉質は柔らかく内臓ごと食されるジビエ料理の高級食材でもあります。日本でも以前から狩猟鳥獣の対象ですが、捕獲制限が設けられているほか、狩猟対象から除外した地域もあります。



・旅鳥

繁殖地に移動する春、越冬地に向かう秋、鳥たちは住みよい環境をもとめて年2回の大きな移動を繰り返します。そんな渡り鳥たちの中継地点に位置しているのが長崎市。ここではその一部を紹介します。



「アカハラダカ」全長30cm ↑

ハト位の小さなタカで、秋には集団で渡りをする事で有名。特に長崎県は朝鮮半島から飛び立った群れが南下するメインルート上にあり、対馬の内山峠、佐世保市烏帽子岳などが観察地として全国的に有名。長崎市内でも多い日は1000羽を超えるタカの雄姿を見ることができる。時期は9月中旬から下旬に多い。

「ハチクマ」全長57～61cm→

小型の哺乳類や鳥類を捕食する猛禽類と異なりハチクマは主にハチを食べるタカです。そのため羽毛は鎧のようにびっしりと分厚く覆われています。日本各地で繁殖したハチクマが秋に日本を最期につうかするのが五島列島。数は少ないですが長崎市内でも見ることができます。



「ヨタカ」全長29cm

名前のお通り夜行性でひと目につくことは殆どありません。かつては市内の里山でも鳴き声を聞けたのですが、今日ではその風情豊かな声を夏場に耳にすることはできません。運がよければ渡り期に通過個体を目にする程度です。



「ノジコ」全長 14 cm

冬はフィリピンなどで越冬しますが、繁殖地は東日本に限られた世界的にも希少なホオジロの仲間です。長崎市では春と秋の渡り期に毎年観察されることから、日本の何れかで繁殖する個体群の渡りルートになっていることは確かなのですが詳しいことはわかっていません。



「シベリアアオジ」全長 16 cm

さきに冬鳥の項目で紹介したアオジの亜種とされ、頭をスッポリと覆うような灰色の頭巾のような頭部が特徴的。次期鳥類目録8版においては独立種として取り扱われる予定。国内で繁殖するアオジとは異なり、春と秋の渡り期のみ観察できます。



「シマアオジ」全長 15cm

かつては北海道全域に繁殖のため渡来していたのですが、今はわずかに数つがいが確認できるだけです。近い将来日本での絶滅が最も懸念されており、国際的な保護の気運が近年高まり、中国ではパンダ並の保護に乗り出しています。北海道に渡るものなのかは不明ですが、市内でも毎年数羽が確認されます。写真は見落とされがちな雌の個体。



「エゾビタキ」全長 14.5cm

日本では繁殖せず、主にシベリアや中国北東部にて繁殖。越冬地である台湾やフィリピンに向かう途上の秋に日本列島を通過する、代表的な小型の旅鳥。近似種のコサメビタキやサメビタキについては日本でも繁殖しますが、いずれも長崎市内での繁殖事例はなく、旅鳥として扱っています。



「センダイムシクイ」全長12～13cm

囀りが「焼酎一杯グィ〜」、「鶴千代君〜」などと聞きなされるメジロ位の小さな野鳥。その鳴き声は、夏の代名詞として広く利用され映画やドラマなどでもBGMとしてよく使われています。長崎市では8月初旬には見られるが、6月に見かけることはなく、囀りも聞かないことから繁殖していない模様。春と秋の渡り期は普通に見られる種です。



「ツバメチドリ」全長25cm

付近を何度も旋回しながら俊敏に飛びまわるさまはツバメとよく似ていますが、ツバメに比べ大柄で、その飛翔姿は圧巻といえます。もともと南方系の野鳥で繁殖地の北限は台湾だったのですが、近年では日本各地でも見られるようになり、市内でも春の渡り期には必ず見かける野鳥です。夏場に幼鳥の目撃例もあります。



「ブッポウソウ」全長29.5cm

夏鳥として日本各地の山間部の里山などに飛来。翡翠色の体色からカワセミ同様、親しまれている野鳥です。長崎市内では主に春と秋の渡り期に観察されます。この個体は稲佐山にて6月に確認したもので、おそらく九州のどこかに繁殖のため立ち寄ったものだと推測しています。渡り期は身近な場所で意外な野鳥と出会えるのも楽しみのひとつです。



「コルリ」全長14cm

オオルリが木上で見かけることが多いのに対してコルリは地上にいることが多く、また暗い場所を好むため、なかなか見る機会の少ない野鳥です。囀りはコマドリに似た声ですが調子が異なります。標高の高い地域で繁殖するため長崎市内での繁殖例はなく、福岡県や大分県では繁殖する地域もありますが数は少ないです。



・迷鳥(稀な記録のある旅鳥)

「アカヒゲ」全長14cm

日本の固有種にして、長崎県内では男女群島に棲息していますが、日本本土域で観察される例は極めて稀。おそらく秋の渡り期に天候不良などで迷いこんだものでしょう。春の渡り期にも囀りを確認できることがあります。



「ベニバト」全長23cm

ハトのなかでは小型で大きさはムクドリくらい。本来の棲息地は中国南部、台湾、フィリピンなど。本来は渡りをする野鳥ではないのですが、長崎市でも数年に一度は迷行してくる野鳥です。長崎市ではハトが市の鳥に選定されており、この場にて紹介いたします。



「コゲンカンドリ」70~80cm

本来の棲息地は南太平洋からインド洋などの島々周辺の海域。秋の台風通過後などに迷鳥として全国的に記録があります。大きさはトビと同大またはやや小さい(画像参照)。魚類を捕食する大型の海鳥ですが、ミサゴのように生きた獲物を捕えるのではなく、弱ったりして海面に浮かぶ魚を好んで獲っているようでした。



「ミヤコドリ」全長45cm

冬鳥として日本各地の干潟に渡来しますが、棲息に適した環境がない長崎市で見ることはほとんどありません。ただし長崎市は地理的に様々な渡り鳥の空路(フライウェイ)になっており、悪天候などの条件により一時避難のため舞い降りるケースがあります。



「ハイロオウチュウ」全長26～29cm

本来の生息地は中国南部、東南アジア、インドなど。以前は非常にまれな迷鳥として局所的に観察される程度でしたが、最近では南西諸島ではほぼ毎年、九州でも見かける機会が増え、関東でも見られるなど日本各地での確認例が増えている野鳥です。背景に温暖化の影響があるのかもしれませんが。



「タカサゴモズ」全長24～25cm

和名の高砂は台湾由来のものと思います。こちらも生息域はハイロオウチュウと同じ。留鳥性の強い野鳥でもあり、国内で見える機会はずくないのですが冬場に局所的に見られる傾向があります。詳しい飛来についてはわかりませんが、秋の渡り期に迷いこんだものが冬場は南下せず付近にとどまるのかもしれない。



「チフチャフ」全長12cm

ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬はアフリカ北部で越冬するムシクイの仲間。日本には数少ない冬鳥として各地に記録があります。長崎市での過去の記録はわずかに1例のみですが、他に鳴き声を聞いたという例も。名前のチフチャフはこの鳥の独特な旋律に由来するものです。



「カワビタキ」全長14cm

主な棲息地はパキスタンから中国南西部、台湾に至ります。国内での記録も各所に点在しているのですが、飼い鳥として輸入されていることもあり籠脱けの可能性もあり、これまでは日本産鳥類目録には加わっておりませんが、時期目録改訂では日本にも記録のある野鳥として登録されるのかもしれない。近年、南方系の野鳥の飛来が増しているのは確かだと思います。

